
Side by Side

Miharu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Side by Side

【Nコード】

N7130D

【作者名】

Miharuru

【あらすじ】

幼馴染のまま大学生となり、東京と大阪に離れてしまった平次と和葉。恋人同士になった新一と蘭も交えてこれからの2人は…後々オリキャラも出てくる予定有り

【1】

まだ5月になったばかりというのに、昼間はジャケットを脱いで半袖で十分なくらい暖かい。

大阪から東京までの新幹線での移動は、高校時代に何度も経験しているのだけれど

隣に誰も居ない1人きりというのは初めてで、ほんの少し緊張する。

今までは。

話をしていればあつという間に到着していた。

疲れて眠ってしまっても、必ず到着前に起こしてくれていた。

2人で寝過ぎそうになっても、2人一緒なら心強かった。

この距離をこんなに長く感じるなんて、思わなかった。

高校3年の秋。

蘭の所に新一が帰って来た。

誰よりも一番に蘭に逢いに来た新一の胸に、蘭は迷う事なく飛び込んだ。

新一もその場で蘭に想いを告げて、2人はただの幼馴染から恋人同士になったのだ。

そして3月、新一と共に東都大学へ進んだ平次は单身東京へと旅立ち、大阪で

地元の大学へと進学した和葉と別々の生活が始まった。

ずっと離れていた新一と蘭とは反対に、物心ついた頃からあまりにも近くに居た平次と和葉。

結局、平次は自分の想いが何であるのか気付かないまま、そして和葉は想いを伝える

勇気がもてないまま、2人は『幼馴染』と言う関係のまま別々の道を歩き出した。

お互いが側に居ない違和感。

新しい生活に慣れるまでの慌しさに紛れて、気付かないフリをしていたけれど。

やはりどうしても落ち着かない4月の半ば、蘭の提案でGWに和葉を東京に呼んで

久しぶりに4人で逢う事になっていた。

「和葉ちゃん!!」

「あっ蘭ちゃんっっ!」

やっと東京駅に到着した新幹線から降りた和葉を見つけて蘭が駆け寄って来る。

「わざわざ迎えに来てくれたん？」

「うん。だって早く和葉ちゃんに逢いたかったんだもん。」

前回和葉が東京へやってきたのは3月。だからそんなに長い期間逢っていないわけではないが、やはり高校生から大学生になり生活が大きく変わったこともあり、すごく久しぶりに感じる。

ひとしきり再会を喜びながら、和葉は無意識に平次の姿を探していた。

そんな和葉の視線の動きに気付いた蘭は

「あのね、本当は服部くんが迎えに来る予定だったんだけど、急に警視庁から呼び出しがかかったのよ。事件の後処理だって行ってたから終わり次第合流する事になってるの。」

「そうなんや…。相変わらずやね。」

そう言いながら微笑む和葉が、蘭にはなんだか寂しそうに見えた。

【2】

警視庁に行った2人が戻るまでしばらく時間がある。

蘭と和葉は街に出かけてショッピングを楽しんだ後、近くのカフェで少しゆっくりして行く事にした。

春の陽気を楽しもうと、せっかくだからオープンテラスの席に座りおしゃべりに興じる。

新緑の木々の合間から零れ落ちてくる陽の光。

蘭の右手の薬指には新一に贈られたであろうステディリングが嵌められており、時折木漏れ日に当たってキレイな光を反射していた。

—— ホンマ蘭ちゃんきれいになって、幸せそうやな…

幸せそうな蘭の笑顔に、陽の光が良く似合う。

和葉は親友の幸せが自分の事のように嬉しい反面、ほんの少し羨ましい気持ちで眩しげに蘭の笑顔を見ていた。

「服部くんとは連絡取ってる？」

「…ううん。なんや平次も新しい生活に忙しいん違うかなって。あたしも急用がある訳や無いし…」

あ、でも今日来る事は、蘭ちゃんと日にち決めてからメールしたよ。返事は『分かった』だけやったけどね。」

「そうなんだ…」

「まあ平次の返事なん、前からそんなんやったし、蘭ちゃんから元気な様子聞いてるもん。」

和葉は笑いながら平気なフリをして蘭にはそう言ってから話題を変えた。

実際、一緒にいる頃は何も考えずに毎日のようにメールや電話で連絡をしていた。

何の用事が無くても「なにしよるん?」「気いつけてね」「おやすみ」そんな一言でもメールしていた。

だけど。

東京と大阪。物理的な距離の遠さに加え重くのしかかる「幼馴染」の平次との距離。

相手の生活や状況が見えないので考えすぎて、メールをするのすら躊躇してしまっていた。

そしてもともとあまりマメではない平次から用事も無いのに連絡があるわけも無く、

和葉から連絡をしない事で、なんとなくお互い連絡をすることも無く日々は過ぎていた。

新一がコナンだった頃は、平次と共に蘭の家に泊まっていたのだが、今では平次も自分のマンションがあり
新一も自宅に戻っている。和葉は蘭の家に泊まるつもりだったのだが、蘭の提案で今回は和葉が滞在する間、
蘭も平次もみんな一緒に部屋がたくさんある新一の家に集まり一緒に泊まる事になっていた。

遅くならないと言っていたとはいえ、時間のハッキリしない新一と平次なので、今夜は外で夕食にせず
蘭と和葉が夕食を作って2人を待つことにしていた。

「あつ新一たち、帰って来たみたい！」

玄関の方で音がしたのに気付いて、蘭が迎えに出る。
どうしようかと一瞬躊躇しながら、少し遅れて和葉も玄関へと向かった。

久しぶりに逢う新一と、そして平次。

1カ月ぶりに会う平次は、見た目には何も変わってない。

新一と蘭が並んでリビングへ移動し、その場に平次と和葉が残された。

「おう、無事に着いたんやな。」

いつもと、今までと変わらない口調で声をかけてくれる。

「うん、平次も元気そうやね。」

「オマエの事やから、新幹線乗り遅れたり1人でどっか迷子になって、ねえちゃん困らしたんちゃうか？」

「そんな事あるわけ無いやん。ちゃーんと時間どおり着いて蘭ちゃんと街で遊んできたもん。」

「ほーか。そら和葉もチョットは大人になったんかいな。」

「…平次は相変わらずや。全然大人になってない。」

「なんやと？」

「早よ、手洗らって来て。蘭ちゃんとたくさんご飯作たんや。すぐ用意するから。」

物心ついてからずっと一緒の時間を過ごしてきた2人。

こんなにも長い時間離れて過ごした事など無かったが言葉を交わすうちに、離れていた時間を感じないいつもの会話が出来ることになった。

【2】（後書き）

なかなか思うように話が進められていませんがお付き合い頂けると嬉しいですよ。。。

【3】

夕食の片付けが終わり、お茶とデザートを用意をする。

「あ、そうだと和葉ちゃん。このセット庭に持って出ない？さっき見たら月がすごくキレイだったの。」

「そうやね。たまにはそんなのもええね。じゃあ持って出よう。」

リビングから外に続くテラスにもテーブルがあるが、せっかくだから芝生の先にあるガーデンテーブルへ
カップとデザートを乗せたトレイを2人で運んだ。

「ホンマ、今日の月はキレイやね…」

「でしょ？じゃあ和葉ちゃん。私、新一たち呼んでくるから、あと
の用意お願いね。」

「うん、任しといて。」

和葉は手際よく、お茶やデザートを取り分けたりしてテーブルに準備していく。

間もなく準備は出来てリビングの方をみるが、まだ3人の姿は見えない。

新一と平次は書斎で事件の資料の確認をしようと言っていたので熱中してなかなか切り上げられないのだろうか。

「はあ…」

さっき夕食の時の会話を思い出して、和葉はひとつ溜息をついた。

蘭の和葉の手料理を、新一と平次は残さずに食べてくれた。

誉めるのが上手な新一に比べ、平次は何も言わないけれど、何も言わずに食べている事自体が

『美味しい』と言っているようなものだと言ったので嬉しかった。

ただ、何気なく話してくれる最近の出来事。

平次にも関係している話で出てくる場所、人、物、出来事…

色んなことが出てくるたびに

『それって何?』

『それってどんなん?』

『それって何処の人?』

それって、それって、それって……

今まで平次に関する事は、事件での出来事をのぞいては和葉は何も聞かなくても
場所も人も物も、殆どのが分かっていたし、想像も説明も出来た。

それなのに、今は自分の知らない場所で、自分の知らない人達と、自分の知らない日々を
平次が過ごしていることを感じ、離れていると言う事実を改めて実感した。

『幼馴染』としていつも側にいたはずなのに。
『幼馴染』として誰よりも側にいたはずなのに。

東京と大阪。
離れている距離がを繋ぐ絆として『幼馴染』はもう通用しないのかもしれない。

そんな事を考えながら見上げた月から、和葉は目が離せなくなった。
今夜は月の光がとてもキレイで、リビングからもれる灯りなんて要らないくらいである。

満月、ではない、ほんの少し欠けた月。
満たされない和葉の心にシンクロする。

自分では光を発する事の無い月。
不安定な自分の立場に、シンクロする。

柔らかな月の光を見つめながら、和葉はまたひとつ溜息をついた。

【3】（後書き）

進まない話……。読んで頂けているようですが、いかがでしょうか？

【4】

GW中の5月4日は新一の誕生日である。

そして今回は、新一と蘭が恋人同士になって初めての誕生日というイベントでもある。

蘭も新一も4人で一緒に過ごそうと誘ってくれたけど、和葉は2人きりでの時間を過ごして欲しくて、和葉は蘭に「平次と出かけたいところがある」と告げると蘭は快く送り出してくれた。

しばらく平次と2人で歩いた所で、平次が口を開いた。

「で、何処行くねん？」

「ん？別に無い。平次のお勧めの場所どこでもええよ。案内して。」

「何処もないんやったら、工藤らと一緒に出かけたほうが良かったんちゃうんか？」

「アホ。いくら2人が『一緒に』言うてくれたって、2人だけで過ぎた方が楽しいに決まってるやん。」

誕生日なんやで？蘭ちゃんかてイロイロ考えてるやろうし、工藤くんかて期待してるハズや。」

「誕生日なん、工藤がおらんかった時期以外はずっと一緒に祝ったはずや。」

「それは『幼馴染』としてや。『恋人』としては別なんよっ。」

そう言って、和葉はポンポンと数歩前に出て、平次に顔が見えないところでこっそり溜息をつく。

――『恋人』として…か……。

恋人になった新一と蘭。

今までだって4人で一緒に過ごした事は何度もあったけれど、この数日一緒にいて感じる2人の空気。

幼馴染の時だってお互いを想う気持ちは十分感じられていた。けど今は、自分の想いが伝わり自分も相手の想いを受け止めている…そんな分かり合えた、そんな関係。

幼馴染として積み上げてきた信頼関係を土台にして、新しい関係を築きつつある2人。

…自分達には、まだ無い、もの。

幼馴染が不満なわけじゃない。だけど、離れている今、とても心元無いと感じている現状。

「で、どこや？」

「え？」

「ホンマは行きたいトコ、あるんやろ？言うてみ。」

まるで和葉の心を見透かしたような、平次の言葉。

「なんでそう思うん？」

「アホ。何年一緒におる思うてるんや。オマエの事なん、分かるわ。そんなに言い難いトコなんか？」

「…平次の学校。」

「東都大か？…それだけか？他にもあるやろ？」

「…と、平次のマンション、なんやけど…アカン？」

「何にも楽しいモン無いで？」

「でも、見てみたいねん。」

和葉が下から見上げるようにして平次の顔を覗き込む。
今まで履いたことの無い高さのヒールの靴を履いているのか、心なし今までより近い距離でその顔を見せられドキッとした心を誤魔化すかのよう、

「オマエも物好きやな。行くで。」

「ええの？」

「行きたいんやろ？」

「うんっ！」

嬉しそうな笑顔を見せる和葉に満足しつつ、平次は歩き出した。

平次が東京に出てきて、和葉逢わなかったのはたった1ヶ月。だけどすぐに逢える距離に居なかった1ヶ月。

ものごころついてから、こんなに逢わない日は無かった、と思う。事件で何日も帰らない日はあったが、せいぜい10日位だったし、日にちがかかる遠出の依頼には迷わず和葉を連れて行ったし、和葉も当然のように付いて来ていた。

久しぶりに逢った和葉は楽しそうにしていながら、どこか何かいつもと雰囲気が違う気がする。

今までに無く離れていたから、そう感じてしまうのか：

和葉だって、自分の知らない新しい学生生活、自分の知らない新し

い生活を送っているからだろうか。

『自分の知らない』と言う考えに、平次はちよつと眉間にしわを寄せる。

今まで和葉の事なら何でも知っていた。場所も人も物も、何を考えているかなんかもたいてい想像も説明も出来た。だから離れている事にも何も不安は無かった。

だけど、実際に離れてみて側に居ない居心地の悪さと苛立ち。そして並んで歩いている今の、居心地の良さと安心感。

新一の誕生日だからと気を使う和葉の気持ちは、和葉ならそんな事も言い出しかねないと分かっていたから何も言わずに一緒に出てきた。

それに何より和葉の「行きたいところに連れて行って」と言う言葉が心地よかった。

今までは。

たいてい休みの日には和葉が

「○○に行きたいっ！」

「○○を見に行こうっ！」

「○○に連れて行ってっ！」

そう行って誘いに来た。

和葉が誘わないときは、和葉が「見たい」「行きたい」「食べたい」

と言っていたものを思い出して平次がそこへ連れて行った。…大概は約束をキャンセルしたお詫びや怒らせた時だが。

今回、和葉が東京に出てきて、まず最初に自分の部屋や学校が見た
いと言いつつ出さうと思っていたのがなかなか言わず、興味がな
いのかと思うと、心がざわついた。

だから、和葉の行きたいという願いを聞いて、連れて行くと言った
時の和葉のいつもの笑顔を見て平次は東京に来てからずっと感じて
いた心の隙間が埋まっていくのを感じていた。

【4】（後書き）

アクセスありがとうございます。良かったら感想等も聞かせて下さると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7130d/>

Side by Side

2010年11月6日01時56分発行